

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0467 ◆◆◆

18/01/24

【 110 円割れ現実味も、「分布帯」では急落予想しにくい 】

ドル/円相場の 110 円割れが現実味を帯びてきた。先週レポートしたように、筆者の今年の相場観は「中立」であり、もう少し詳しく書くと昨年 12 月には「2018 年の前半にドルは高値を付け、後半にドル安進行」と具体的に予想している。

そうした意味では、足もとの動きは予想と逆方向の値動きで、正直悩ましい。しかし、「価格分布帯」の観点からすると、110 円を割り込んでも一気にドル安・円高が進む展開は見込みにくく、飽くまでもジリジリとしたものに留まる公算が大きいようだ。

◎108 円台をピークに「104-113 円台」と、広範囲に「居心地良いゾーン」が位置

詳細についてはバックナンバーに譲り割愛するが、「価格分布帯」において、過去の取引が多かった価格帯は「居心地の良いレベル」で抜けることは容易でない反面、取引が少なかった価格帯は「居心地が悪いレベル」で、アッサリとスルーしていくような傾向が見受けられる。

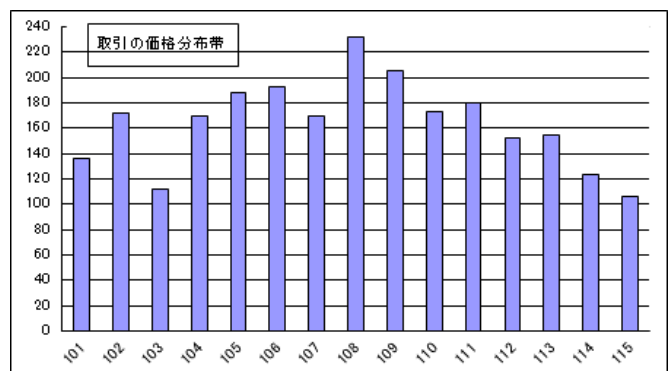
そんな基礎知識を頭に入れたうえで、最近の相場を振り返ると、10 日に昨年 12 月以降形成していた 112 円を下限としたボックスを割り込み、ここにきてさらに続落、110 円割れを視界内に捉えた値動きだ。これを「価格分布帯」で見た場合、114-115 円台も過去の取引日数が 100 日を超えており、「極端に商いが薄い」ということはないが、その前後、とくに下方向(ドル安方向)は取引日数 200 日以上、過去の最多取引価格帯である 108 円台を中心に、104-113 円台と、かなり広範囲にわたって「取引の厚い」価格帯が位置していることがみてとれる(詳細は下図参照。横軸が取引価格、縦軸は取引日数)。つまり、分布帯の観点からすると、昨年 12 月以降 112-113 円台を中心とした揉み合いをたどってきたことは不思議でなかったのかも知れない。

また、今後の展開を考えた場合、最近になり、形成してきたボックスの下限を割り込んだものの、予想外に値が走らないのも分布帯の観点からは説明づけられるだけでなく、いましばらくのあいだは求心力が高く、居心地の良い 104-113 円台での推移が続く可能性もある。

昨年は年間変動率が 10%以下になるなど、歴史的な小動きに留まったことから、今年は大相場を期待しているのは決して筆者だけではあるまい。しかし、分布帯的には 104-113 円にどっぷりとハマってしまっている状況を脱却しないかぎり、今年も昨年の二の舞、2 年連続の小動きで終わる危険性を否定出来なくなりそうだ。

そうした危険性を脱却するには、下方向なら 103 円台、上方向なら 115 円台の壁を「しっかりと」突破する必要がある。

本稿執筆時に推移している 110 円前半からは、どちらも遠く、一朝一夕に到達できるレベルではないものの、抜けた場合はレベル感が変わり、新たな世界が到来するだろう。「いつ」という具体的な時期を明言することはできないが、年内のどこかで起こりうることを信じ、虎視眈々とタイミングを待ちたいと思う。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

